

現代音楽邦

PRO

MUSICA

NIPPONIA

第118回定期演奏会

プログラム

第26号

1991年

26 春

特集・座談会
「日本音楽集団の委嘱・創作活動を語る」
らじかる・しりーず《ズバリ発言!》

木津のぶ



しらすべ

「藤十郎の恋」によせて

「日本音楽集団」のめざましい活躍の謎は、五線譜に書かれた音を、たちどころに邦楽器で実現できるという能力が結集していることによるものだと思います。従来邦楽の世界が家元制度やお師匠さんからの芸風の伝承という閉ざされたかたちをとっていたのに対して、「音楽集団」の存在は、五線譜による発想をも包み込み、広く開かれたアンサンブルの実現をめざして、すぐれた作品のレパートリーと共に歩んでこられました。ここで九月の公演に、私のささやかな作品、藤十郎弥生狂言くどきの段^レを取り上げていただくこととなり、とても有難く思っております。菊池寛原作の「藤十郎の恋」は、歌舞伎でも坂田藤十郎の世話物として広く知られておりますが、このドラマチックな構成に惹かれて十数年前、一部うたものとして作曲したことがあります。が、本来、この台本が邦楽器で書かれるべきことは自明のこととして、ただ私にとつて邦楽器の知識も経験もなく、したがってチャンスもなかったというのが本当のところでは、と申せ、自分が日本人であり、本能的に邦楽器に親しみを感じておりましたのも事実で、三木稔氏の『日本の楽器』を興味深く読み、また「音楽集団」の種々のプログラムを洋楽の演奏会では味わえない喜びを持って聴いてまいりましたことが、今回の実現につながったのではないかと考えます。オペラでも浄瑠璃でもなく、テノールの藤十郎とメゾソプラノのお梶が、邦楽器のアンサンブルと共演する、というかたちを取りましたのが、弥生狂言くどきの段^レという題名は、今回第二幕の（偽りの恋）の場面だけに終止しているところからそのように名づけました。このうたものが、それなりの効果をあげることができるよう念じつつ、邦楽器群の未来へと、夢は大きくふくらんでゆきます。

作曲家 田中 友子

目次 ● Contents

しらすべ	田中友子	1
第118回定期演奏会—プログラム—		2
モービル音楽賞贈呈式報告	矢野輝雄	5
選考委員あいさつ		
特集・座談会「日本音楽集団の委嘱・創作活動を語る」		
【出席者】石田一志・新美徳英・和田 薫・工藤秀也		6
半田淳子・尾崎太一（司会）田村拓男		
らじかる・しりーず《スバリ発言》	木津のぶ	13
日本音楽集団演奏会から		
第116回定期演奏会	富樫 康	15
第117回定期演奏会	富樫 康	
香港アーツフェスティバル報告	米澤 浩	16
現代邦楽事情—その9—	田中隆文	17
カーネギーホール百周年記念コンサート		18
小さな空間大きな出会い	工藤哲子	19
日本音楽集団の主な活動記録		21
日本音楽集団の今後の予定		
環にほん海国際芸術祭報告		22
日本音楽集団メンバー表		
編集後記		26

第118回定期演奏会

一九九一年五月十三日(月)七時
津田ホール

— モービル音楽賞受賞記念 — プログラム

一、文様(あや)Ⅰ・Ⅱ

〔箏Ⅰ〕花房はるえ

〔箏Ⅱ〕木村玲子

〔十七絃〕宮越圭子

三木 稔 作曲

私にとってこの曲は、アンサンブルの面白さを教えられた思い出深い曲です。

三面の箏から出てくる音がまるで糸のようで、薄い糸・濃い糸・細い糸・太い糸、さまざまな糸が織りなし一枚の布を創り上げる感じがします。

絹糸で織ったシルクの感触であったり、何色もの糸で織った幾何学模様を思い浮べたり、淡い色合いのぼかし風を感じたり、練習する度に、きょうはどんな模様の布

が出さるかしたら? と楽しんでいました。

この音がこうきたからこの音色で答えてみよう、ちょっと遅めに出てびっくりさせてみようかなと遊び心がおきたり、アンサンブルの楽しさに酔いしれていました。

あれから十数年、いろいろな経験を経て音楽的にもより豊かに表現できるのではないかと思えます。

味わい深い布に織り上がることを楽しみにしています。

(花房はるえ)

二、ソネットⅣ

〔尺八Ⅰ〕藤崎重康

〔尺八Ⅱ〕水川寿也

〔尺八Ⅲ〕米澤 浩

三木 稔 作曲

「ソネット」という曲はI〜Vまであり、いずれも尺八の曲です。Iは「尺八のためのソネット」としてよく知られ、IIは二重奏で「七夕の曲」、III、Vは独奏で「山千禽」、「金閣賦」というタイトルがついています。この「ソネットIV」は一九八二年に岩波映画「過疎地の村を支える人々」のために作曲され、私もその一連の録音に参加していたのですが、この曲を吹いたかどうか覚えていな

いところを見ると、きっと笛だったのでしょうか。けれどこの曲を吹くと、今でもきまってその時の映画のシーン（赤い夕日をバックにトラクターで、ただ一人黙々と働く過疎地の村の人の姿）が思い出されます。他の曲のようにタイトルがほしい気もしますが、私にはこのままのほうが良いのかもしれない。

（藤崎重康）

三、 〈四季〉ダンス・コンセルタントI

三木 稔 作曲

〈踊る春〉〈水巡る〉〈秋・そして〉〈風の花〉〈エピソード〉

〔笛〕 西川 浩平 〔尺八I〕 水川 寿也 〔尺八II〕 添川 浩史

〔三味線〕 太田 幸子 〔琵琶〕 田原 順子

〔箏 I〕 内藤 洋子 〔箏 II〕 熊沢 栄利子 〔十七絃〕 山田 明美

〔打楽器〕 尾崎 太一・前田 文男・望月 太喜之丞・白杵 美智代 〔指揮〕 田村 拓男

作曲者が、かつて作曲を担当した舞踊シーンから楽しく易しい旋律を選び、夏の合奏研究会でアマチュアの方にも演奏できるように再編成された組曲です。四季を表現する各章は文字通り〈踊る春〉、抒情的な〈水巡る〉、〈秋〉、そして、獲り入れの踊りを経て、クールな〈風の花〉、〈エピソード〉でしめくくられる構成になっています。音楽集団のレパートリーの中でもないへん数多く演奏する機会がある曲ですが、地方公演では、エピソードの打楽器の十六分音符のリズムパターンを他のパートの奏者が、玩具とかしゃもじ（広島にて）を手にして、打楽器の力

デンツァが繰り広げられ客席と共に盛り上った思い出があります。箏のパートですと、〈秋〉の冒頭約十小節間、三十二分音符で連なるアンサンブルに苦労したこともありましたが、今でも隣りの楽屋から、〈エピソード〉の琵琶のソロに絡む尺八の旋律がウォーミングアップ代り(?)にたびたび聴こえてきます。

慣れ親しんだ曲を改めて見つめ直し、ひきしまった演奏をお届けしたいです。

一九七三年作曲、第二十一回定期初演。

（内藤洋子）

四、 春三題

〔箏〕 白根きぬ子

〔三味線〕 坂井 敏子

長沢 勝俊 作曲

五、二つの舞曲

長沢勝俊 作曲

- 〔笛〕 西川 浩平 〔尺八Ⅰ〕 藤崎 重康 〔尺八Ⅱ〕 添川 浩史 〔尺八Ⅲ〕 米澤 浩
〔三味線〕 野口美恵子 〔琵琶〕 半田 淳子
〔箏Ⅰ〕 花房はるえ・熊沢栄利子 〔箏Ⅱ〕 内藤 洋子・桜井智永
〔二十絃〕 木村 玲子・久東 寿子 〔十七絃〕 宮越 圭子・大島菜穂子
〔打楽器〕 尾崎 太一・前田 文男・望月太喜之丞 〔指揮〕 田村 拓男

「春三題」は一九七七年五月「森の会」の委嘱により作曲したものであり、同年六月十二日初演されました。この曲は私にとって、はじめての地唄三味線との出会いでした。そのいぶし銀のような影力ある音色と、箏との共演によりかもし出される世界に強く心ひかれたのを覚えております。それから十四年、多くの演奏家により演奏されてきたことをうれしく思っております。

四季の変化に富んだ日本。特に日本の春は穏やかで心なごむものです。しかしそのなごやかさの中にも、ささやかな新しい生命の誕生と躍動が私達に生きていることの喜びを強く感じさせます。三味線と箏の二重奏という伝統と土壌に深く根をおろした組合せをとりながら、従来の手事とは異ったアングルから私の春への想をうたったものです。

(長沢勝俊)

〈二つの舞曲〉は、一九七〇年十月、日本音楽集団の第十二回定期演奏会で初演された。

そのプログラムの長沢氏のことばによれば——第一章は深い悲しみと抵抗の曲であるが、中間部では明かるい明日への夢をうたっている。また第二章は、激しい群舞の響宴である——となる。

初演から二十年後の昨年、私は日本音楽集団の仲間と共に、高松市内の学校十八校を〈二つの舞曲〉をもって巡回公演した。

一校目と十八校目では、演奏が異なる。むろん、質のいかんではない。母の胸に抱かれるような安らぎを感じる長沢氏の曲。はじめはその安心感をもって演奏していた。一日三校を、連日六日続けるうちに、曲は一人歩き

出し、生き物となった。回を重ねること、高揚していく奏者の心より、はるかに曲が飛翔する。音は五線譜から飛び出し、プレーヤーからも解放されて、奏者の心を煽る。自分の出す音に触発され、音の乱舞へ私も飛びこむ。すでに初演のプログラムに、氏は「激しい群舞の響宴である」と記していた。二十年前、確かに氏は、そのことを言葉として認識していた。しかし、奏者の心がこれほど音の響宴に引きずりこまれる曲であることを、果して当時、氏は見通していただろうか。

何でもない拍子木の連打。そのつらなりが、次に出る楽器群の生命を、なおも重ねてゆきぶり起こす。まさに、人生の歓喜をうたった、心の琴線をゆるする名曲である。

(野口美恵子)

モービル音楽賞贈呈式報告

選考委員を代表して—あいさつ(要旨)—

矢野輝雄

昨年11月28日(水)、一ツ橋の如水会館で第20回モービル音楽賞の贈呈式が盛大に行われた。多数列席の中、選考委員からの選考理由が説明され、集団については、矢野輝雄氏から発表された。又、今回受賞の本団(邦楽部門)の他、三善晃氏(洋楽部門)の作品を「ひばり児童合唱団」、ヴァイオリンの漆原朝子氏(奨励賞)が記念演奏を行った。

戦後の現代邦楽の発展は目覚ましいものがある。このことは、日本音楽集団の団員が、発足当初わずか十四名だったのが、二七年余を経た現在では六十名にこえる集団として成長していることにも伺えるところである。

邦楽器として存在意義を与え、あるいは箏演奏家として野坂恵子のような邦楽界のスターを輩出させるなど、現代邦楽に新生面をひらき、広く一般にその魅力を浸透させた功績は顕著なものがある。

当時は、邦楽は大合奏に適さないものという考えかたが一般的であったが、こうした固定観念を打ち破ったのが日本音楽集団である。その意味でも、現代邦楽の普及発展に果たした集団の役割はきわめて大きい。

日本音楽集団の特色として三つの点を上げてみたい。

ことに二十絃のような新しい楽器と多くの作品を生み出し、また宮城道雄によって低音を補うために作られた十七絃に、主

まず、第一は単なる演奏団体ではなく作曲家を含む集団であるということ。長沢勝俊、三木稔両氏をはじめ作曲家を団員にもつことによって、演奏と並んで邦楽器の合奏に適する新しい作品を作ることによって、現代邦楽の分野に多くの作曲家を輩

出させ、その魅力を高めた。これが今日の日本音楽界の貴重な財産となっているといえる。

第二に、日本音楽集団は合奏において優れているばかりでなく、優れたソリストの集団である。ソリストとして活躍している人達が集まることによって、合奏においても高いレベルを示す結果となっている。このことは、個々の団員の芸術的意欲をどのようにして満足させるかという課題を負うものであり、集団運営の今後この一点に懸かっているといえよう。

第三に、その意味において、日本音楽集団こそ創造集団であり、また将来もそうあってほしいと考える。集団に常に新しい挑戦が期待される以所である。団員の危機感に支えられた意欲こそ集団を支える大きな力であり、推進力となることと思う。

今回の受賞を機に、日本音楽集団のさらに大きな飛躍を期待するものである。



モービル石油社長杉原泰馬氏を囲んで



右より杉原社長、長沢勝俊、三善晃、漆原朝子氏

集団の記念演奏

特集・座談会

「日本音楽集団の委嘱

・創作活動を語る」

出席者 石田一志 (音楽評論家)

新美徳英 (作曲家)

和田 薫 (作曲家)

工藤秀也 (ニッポニアメイツ世話人)

半田淳子 (団員・琵琶)

尾崎太一 (団員・打楽器)

司会 田村拓男 (団員・指揮)





田村拓男

コンポーザー・イン・レジデンスという形の契約方法の導入

石田 集団に提案したいことは、コンポーザー・イン・レジデンスという形の契約方法の導入です。ある程度の金額で作曲家と年間契約を結び、身内に引入れ、その中で作品を書かせたり、音楽の展望についても一緒に考えたりすれば大変大きな力になる。こういった例はオーケストラのような大きな団体にはあります。集団の経済的な基盤と委嘱活動とは密接な関係にあります。

田村 日本音楽集団が創立されて今年が二十七年になりますが、日本音楽集団の歴史は委嘱創作活動そのものといえると思いません。振り返ってみますと、今までにずいぶんたくさん作品を委嘱し、日本音楽集団の周辺からたくさん作品が生れていますが、もちろん古典曲も演奏しますが、こういったいわゆる現代邦楽といわれる現代音楽を中心にレパートリーを広げ、定期演奏会のプログラムを組み続けている演奏団体は世界的にもめずらしいのではないかと思います。石田 現代邦楽そのものの運動は個人的なものから徐々に始めて、それまでなかったような

石田 集団に提案したいことは、コンポーザー・イン・レジデンスという形の契約方法の導入です。ある程度の金額で作曲家と年間契約を結び、身内に引入れ、その中で作品を書かせたり、音楽の展望についても一緒に考えたりすれば大変大きな力になる。こういった例はオーケストラのような大きな団体にはあります。集団の経済的な基盤と委嘱活動とは密接な関係にあります。

田村 日本音楽集団が創立されて今年が二十七年になりますが、日本音楽集団の歴史は委嘱創作活動そのものといえると思いません。振り返ってみますと、今までにずいぶんたくさん作品を委嘱し、日本音楽集団の周辺からたくさん作品が生れていますが、もちろん古典曲も演奏しますが、こういったいわゆる現代邦楽といわれる現代音楽を中心にレパートリーを広げ、定期演奏会のプログラムを組み続けている演奏団体は世界的にもめずらしいのではないかと思います。石田 現代邦楽そのものの運動は個人的なものから徐々に始めて、それまでなかったような

のためには経済的基盤が重要であると考えます。

田村 日本音楽集団は大編成のアンサンブルに特徴があるわけですが、標準編成という形がかなり定着してきています。編成に条件をつけることについてもお話しください。



「風を聴く」(新実徳英作曲)を初演。指揮・作曲家自身、第114定期・作曲家の個展①
新実徳英氏を迎えて(1990年6月19日津田ホール)

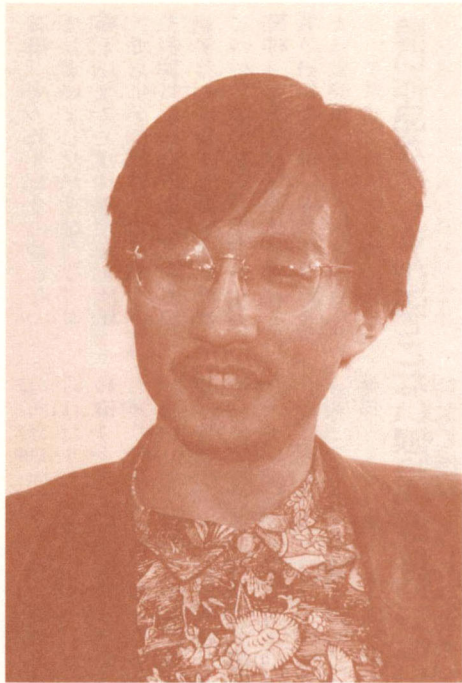
外とのアンサンブルの接点が少ないのでは……

和田 僕が日本音楽集団とお付き合いさせて頂いたのは八十八年のアメリカ公演の時からです。

ミシガンのパーカッション・アンサンブルと日本音楽集団のための作品で、西洋と日本の打楽器のアンサンブルが絶対に出て来るようなものというところで、これは特殊なケースでした。それから振り返ってみますと日本音楽集団は格闘技ではないですが外とのアンサンブルの接点が最近少ないのではないかと感じています。

編成については作家としては先ず自分が求めていた編成を第一に考えるのは当然で、腹が減つたらこれを食べたいというのと同じです。

日本音楽集団の創成期には強力なパワーがあつて経済的基盤云々などは論外であり、三木さんらは邦楽器でいい作品を書きたい、世界の合奏集団に育てたいという強い意志と思想でやってらしたのではないかと思いません。



和田 薫

と 同じです。

日本音楽集団の創成期には強力なパワーがあつて経済的基盤云々などは論外であり、三木さんらは邦楽器でいい作品を書きたい、世界の合奏集団に育てたいという強い意志と思想でやってらしたのではないかと思いません。

集団の機関誌「邦楽現代」創立二十五周年記念特別号の中に第一回定期演奏会の挨拶文が載っていて感動したのですが、「开拓者たる自覚をもつて進めて行く」という意志が風化されつつあると同時に組織的にも低下しているのではないかと思われま

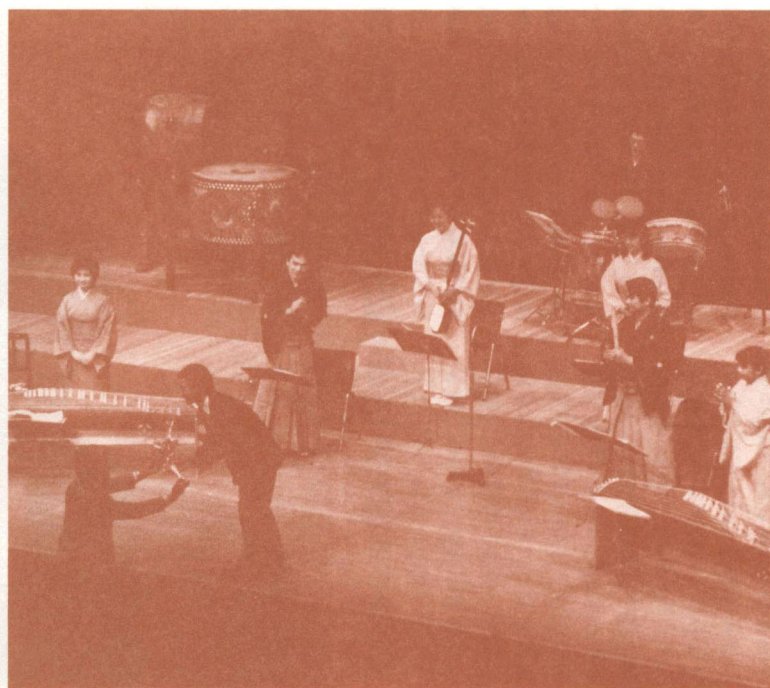
田村 経済的基盤を強め、スポンサーを見つめる、それによつて聴衆を何としても集めなければならぬということから逃れられて、もっと自由なプログラムが組めるのではないかと、いろいろお話がありました。いづれも言葉でいうほど簡単ではないわけで、最終的な目標はいかに多くの聴衆の理解を得られるかですが工藤さん聴衆の立場から、

工藤 私は今まで音楽を聴く場合、単純に面白いかどうかで接してきました。日本音楽集団を知る前は邦楽というものは退屈で面白くないものと思つていましたが、十年くらい前だったので、

工藤 私は今まで音楽を聴く場合、単純に面白いかどうかで接してきました。日本音楽集団を知る前は邦楽というものは退屈で面白くないものと思つていましたが、十年くらい前だったので、

てくるのではないかという夢みたいなこともあつてニッポニア

メイツという会をつくり世話役をしてきました。



結局は団員個人個人のパワーでやってくるよりほかになかった

半田 集団でも今までに何度かスポンサーの件や法人化の問題を検討したり、アドバイザー制度も取入れたりして努力したつもりですが実を結んだとはいえません。結局は団員個人個人のパワーでやってくるよりほかに

なかったというのが現状で、それでよく二十七年間もパンクしないでやって来たなという気はするんですけど……。他の団体はどんな方法でスポンサーを見つけているのか聞いたらありがたいですね。

石田 すっかりお金の話になってしまいました。(笑)。委嘱という事は日本音楽集団がスポンサーになることですから、そうするとそのことは抜かして考えることは出来ないんじゃないかと思うんです。

田村 営業努力が足りないというところもあるでしょうが、集団

良い作品がたくさん出てこない限り活動は伸びない

尾崎 僕はもともと古典の社会(歌舞伎)の人間ですが、芸大に入った頃日本音楽集団と出会い、聴いた曲に感激して是非やりたいと飛込んで二十何年かになりました。今一番感じているのは現代音楽を推進するにはどんな作品が出てくること、それも良い作品がたくさん出てこない限り活動というものは伸びないものだと思います。もちろんプレーヤー自身の技術の鍛練も必要ですが、集団の現状は作品との出会いの点で伸び悩んでいると見ています。聴衆もだんだんと耳が肥えてきて可とするもの不可とするものを選定してきますからね。提供する側もどんないいものを持っていかないと聴衆がついてきてくれなくなる。追っかけてこの状態なんです。

の内容は固すぎて売り難いといわれたりもします。

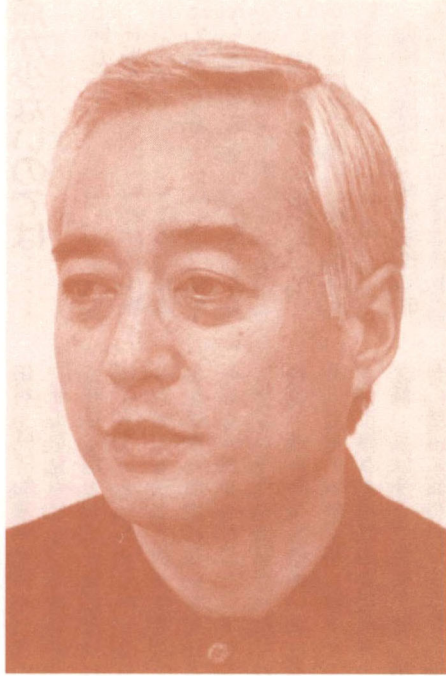
和田 それは集団側のプロデュースの仕方の問題であって、先程話しましたように他に類を見ない唯一の団体なんですから、買手が殺到してあっちでも買いたい、こっちでも買いたいという器ですよ。

それと作曲家とのコミュニケーションのとりかたによって作品を生かしたり殺したりもしていると思います。ひいては再演の問題にも係わってきます。

私たちにもっとお金があれば日本中の現代音楽作曲家に毎年

契約して、この方には五本、あの方には三本と頼めるわけですね。そうすると当然いい作品も生れてくる可能性もありますが、今はそれが出来ない状態なのでしばらくお願いしているということです。

田村 素晴らしい才能をもった作家や作品に出会いたいということは、我々の話の中に常に出てくることです。誤弊があると困りますが、作曲家の中には自分の頭や机の上だけで書いているのでないかというような作品に出会うことがまあります。新実さんは作曲家として常にこういうことを念頭において書いているんだというようなことがありましたら話して頂けませんか。



尾崎太一

書く側としては自分の信ずるところを書くしかない

新実 ちょっと難しい質問なんですよね(笑)。ペーパーミュージックにしかすぎないものを書く学生っていうのはたまに見かけるんですけどね。作曲家が単なるデスクワークでやってるというのはありえないと思う。で、僕自身は自分が書いたものは必ず聴衆に理解されるなどという不遜なことは考えないわけですね。自分が一番やりたい、今こういうことをやらなきゃあ

けないということを探りあて、発見してそれを作品という形にしていくわけです。これを演奏者が受入れてくれるかどうかは自信はないです。とにかくやってみてくださいと。ただし書く側の人間としてはその作品のある手応えとか信念とかは持っているわけです。作曲家は発信する側で、演奏家は作曲家からの発信を受信してさらに聴衆に自分のものとして発信するとい



聴衆と演奏家と作曲家が一緒になった創造活動を

う二重の役割があるわけです。書く側としては自分の信ずるところを書くしかない。あるいは、今、世の中でこういう傾向がはやっていくとかいうのは、どこかで影響を受けるでしょうけど直接受けることはない。こういう音楽を書く聴衆が喜ぶだろうと思っても、だからといってそういうものを書くことも出来ないわけですね。いってみれば現代音楽をやろうなんて思っただけで入ってくる人は減ってくるんじゃないかと思えますね。これだけ経済的困難をかかえたジャンルに才能のある人がどんどん飛込んでくるのは今後は難しいと思います。商業音楽に行ったら人もたくさんいるし。ではどうやってやって来たかといえば、半田さんもさっきいわれたように個人のエネルギー、パワーでやって来ただけです。僕もまあ委嘱料を頂いて邦楽の曲を書くわけですが、それで食べて行けるわけでもありませんし。しかし、それがどのくらいの負担かということも分ると、その点に関しては結局痛み分けみたいなところがあると思うんです。だからといってお客さんを喜ばせるためにこういう曲を書くというのではないわけです。

工藤 集団の方たちは演奏家として

の意識が先なのか、創造意識が先なのか分りませんが、聴衆側から見ると演奏団体であると同時に創造団体であるというイメージがあり、そのことがエネルギーを生んでいると思います。聴衆と演奏家と作曲家が一緒になった創作活動をやりたいと、いくつか提案したこともありますが、なかなか実現していません。そういう状況も一度作り出さねばという気がするんですが。

和田 邦楽の歴史では演奏家自身が創作家でもありましたが、それと同じように集団も創作を

やはり団員一人一人のチケットの手売り頼り

半田 こちら側としては、お金も揃えて好きな作曲家に好きなことを書いて貰って、好きなことがやれる演奏会ができたとしても、じゃ聴衆をどういう風を集めるかっていうと、やはり団員一人一人のチケットの手売りに頼っているわけであって、黙ってパンパン集まるという状況ではありません。聴衆がその演奏会を聴いて、ああいう曲では

しながらやって来た。そうならざるを得なかったわけですが、創作というものに対する意識は非常に高かった。しかし委嘱作品がたまり、レパートリーが出来てくると集団の伝統であった創作へのエネルギーが薄れてきて単なる演奏団体になるのか、もしくは聴衆もとりこんだ創造団体を続けるのかといったところだと思えます。そこは洋楽、オーケストラの世界とは全くコンセプトが違うと思われ、それが非常に個性でもありますのでどんな生かして欲しいと思います。

二度と聴きたくないといわれたりするとは非常につらいのです。和田 そこがさっき田村さんがおっしゃった運営の方向になると思うんです。どの演奏会のプログラムも似たようになってしまっているのではなく、「名曲コンサート」「冒険コンサート」など、バラエティーをもったものにしてお客さんの側からもコンサートを選んだ上で聴きに來れるよう

にすれば良いと思えます。石田 集団のイメージはなんといつても強烈な個性であった三木、長沢さんというお二人の作品が、量も多いですが圧倒的に僕らの耳の中に残っていますね。始めにコンポーザー・イン・レジデンスの話をしました。創立期に三木、長沢さんが果たした役割をこれから望むことは到底無理だと思えますが、それに代わる一つの方法として例えば長期にわたる契約関係で外部から作曲家を招へいし、共感した上で創作活動から運営までのしっかりとしたアドバイスをし作品も生んで行くという契約制度の導入はどうかと思つたわけです。「あの人がやっていた年度」「この人がやっていた年度」という

具合にカラーが変わってパリエーションがでてくると三木、長沢という二色の他に多元になっていき、密接な人的交流もできると思えます。

昨年六月の定期では「作曲家の個展①」があり、新実さんの作品が並びましたが、あれもコンポーザー・イン・レジデンスに準ずるものでとても良かったと思えますね。討議をかきねたプログラミンングも大事でしょうが、一方では個々の意見がまざって色がなくなるよりは、集団の持っているいろんな色の可能性を、ある一つの個性から引出してもらおうということですから



工藤秀也

物議を醸した西村朗作品「巫幻楽」

田村 昨年十一月の定期での西村朗作品「巫幻楽」の委嘱作品ではかつてない騒動があり、演奏家側からも聴衆側からもかなりのアレルギー反応がありました。演奏会当日の直前まで曲順を入替えるかどうかでもめたり、

昨年からとっている聴衆からのアンケートでは後日わざわざ郵送してくる人もあったり、もちろん中には良かったというのもあります。それは音楽ではない。「人前に出して評価を得られるものか否かを公演前に皆さんで十分に検討して、没にするものは没にするといえるだけの勇氣を望みたい」「何等かのエクス

キューズがあつてしかるべきだ」等々内容も厳しいものがありました。

それぞれ言い分もあるでしょうが、こういったことも集団は避けて通れないことだと思いません。

石田 西村作品については否定もあり賛成もあつたでしょうが、最近の問題作が少なかったといえるのではないのでしょうか。創作期には、ある意味では全てが問題になっていったと思うんですね。それが一回一回の付き合いの中で、ある集団の強い個性のほう作曲家の方にかぶって行けば段々問題性は稀薄になって



石田一志

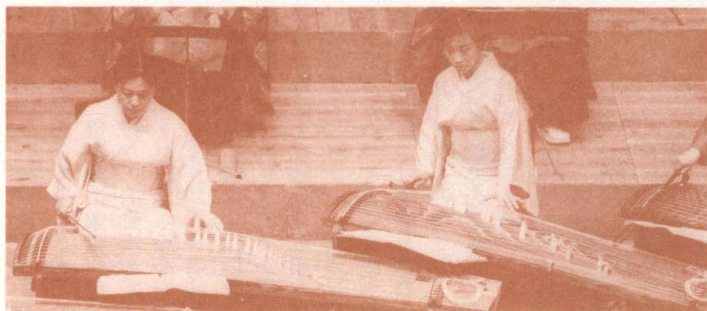
行くかもしれないけど、それに対立した西村君も立派ではないかと思えます。
新実 こういった問題はもう近代に入って作曲家が何かをするという時に常にあつた問題なんです。ですから敢えて論議すべきことではないという気がするんです。ですから今まで物議が起ころなかつたというのが不思議といえは不思議なんです、僕もこれまで二つくらい新作をやっているわけですから、物議の対



▲「巫幻楽」(西村朗作曲)の初演。
 ▼ 第116定期(1990年11月6日・都市センターホール)

象にならなかつたことを不名誉なことかなと思つているんですけど。彼はこういう世界があるということを問うたわけですから、それについて集団がもし今のアンケートにあるように、これはやらないよと拒否すれば、集団はそういう体質のところだという風に我々は判断するわけですね。じゃ、集団のみんなが納得できる作品といえは何かというと、そういう実体というのは実はないんですよ。あるとす

れば、例えば三木さんの曲はみんなが納得してやっているということがあると思いますが、じゃ、それに代わるものがどういうものかは分らないわけですよ。ですから作曲家が常に新しい世界を発見しようとしているわけですから、それに対して、「ノー」と拒否する人がいてもそれは当然だと思えます。だからといって僕は短いタイムスケールの中でリアクションを起こす必要はないと思うんですけど。



作曲家、演奏家、聴衆のこと



半田淳子

新実 ある作家がこの何年、どういうことに注目し、どういう活動をしているかと分ったら、この人に頼めばこの範囲の曲が出てくる可能性があるということは委嘱する方で当然予測できるわけですね。集団の方が個々の作曲家に委嘱する前にどれくらい理解しているのか、評判もよさそうだし、みんなもやってみてもいいんじゃないかということと頼んで出来たものが「ゲゲノ」というものであった。これは作曲家の責任ではないです。聴衆がわかってくれるかっていうのは非常に大事なんですが、これから音楽と自分の関係をどう見ていくかっていう

ことを聴衆の方々にも一緒に考えて頂けるということが必要だと思っんです。音楽にはいろんな側面があって、疲れている時には音楽で慰めて欲しいとか、落込んでいるから音楽で力をつけて欲しいとか、元気な人はこれまで聴いたことも見たこともないような新しい世界に出会いたいと探している人もいます。あるいは音楽は宗教ではありませんから、そのような力はありませんけれど、大袈裟に言えば新しい音楽を聴いて世界観、宇宙観が変わってくる。音楽をエンターテイメントがそれ準ずるものと思っっている人、実はこういう面もあるんじゃないか

いでしようかと、口はばつたい言い方になって恐縮なんです。聴衆を育てるというか、我々自身も育てて開発しなきゃいけないんですけど、同時に演奏家のみなさんも一緒にそういう新しい側面を考えて頂きたいし、聴衆のみなさんも考えて下さるといふ、より前進的な音楽に対する視座の持ち方が広がって行く、聴衆と音楽会との関係がお客さんが集まったとか集まらな

かったとかより、少し別な方に展開し得るのではないかと思っているのですが。半田 その通りと思っんですけど、いざ現実に戻りますと、やはり自分たちがお客集めをしなければならぬので、いつも堂々巡りなんです。新実 それはよく分ります。なんで分るかといいますが、今、口はばつたいことをいっています。が、オーケストラを買って自分

たちが自主的に作品を書いて演奏会をやるうとする、結局やることは何かという、自分で書いて、しかも自分でチケットを売るといふことをやるわけですね。そういう意味ではわれわれは同じ場所です仕事をしているという、つらいものがあります。(紙面の関係で座談会の内容を充分にお伝え出来ないことをお詫びします。)

日本音楽集団委嘱初演作品

委嘱年	曲名	作曲者	初演演奏会
1969	コントラスト	堀悦子	第9回定期演奏会
1969	ディヴェルティメント	佐藤敏直	第10回定期演奏会
1970	しがらみ第2	八村義夫	第11回定期演奏会
1970	民謡群想	若松正司	第11回定期演奏会
1970	マティエール	田中利光	第12回定期演奏会
1971	松尾芭蕉の四つの俳諧「幽」	H・J・コロイター	第13回定期演奏会
1971	二十六夜	三宅榛名	第13回定期演奏会
1972	邦楽器のためのコンチェルト	仲俣申喜	第16回定期演奏会
1972	インド旋律による壁画	牧野由多可	第18回定期演奏会
1973	夢十夜	広瀬量平	第19回定期演奏会
1973	逍遙	入野義朗	第20回定期演奏会
1974	10人の邦楽器奏者のための音楽	甲斐説宗	第22回定期演奏会
1975	メタフォー	柴田南雄	第24回定期演奏会
1975	ヤイレズブ	岡田京子	第30回定期演奏会
1977	風漣	岡田敏弥	第43回定期演奏会
1979	史魂	杵屋正邦	第50回定期演奏会
1979	竹に同じく—15本の管のために	池辺晋一郎	第55回定期演奏会
1980	絃楽	永瀬博彦	第61回定期演奏会
1981	十面埋伏	王燕樵	第65回定期演奏会
1982	1982.5.10	三枝成章	第70回定期演奏会
1984	青のモチーフによるコンポジション	佐藤敏直	第85回定期演奏会
1984	秋のコンチェルト	中村八夫	第85回定期演奏会
1985	二重奏曲	吉川和夫	第88回定期演奏会
1985	夷曲「西綾楽」(ヒナプリサイリョウラク)	芝祐靖	第91回定期演奏会
1986	和	叶小勉	第94回定期演奏会
1986	天点譜	池辺晋一郎	第93回定期演奏会
1986	軌	喜多嶋修	第94回定期演奏会
1986	KANGEN	スマッツ・スケジュール	第94回定期演奏会
1986	タクシム	間宮芳生	第96回定期演奏会
1987	弥勒効果 ※	吉松隆	1986年第4期外演(アメリカ)
1988	粉ひき池の空に雲	カウドゥリ	第103回定期演奏会
1988	枕草子—橋本治訳による	青島広志	第106回定期演奏会
1989	座興七重 ※※	和藤薫	第110回定期演奏会
1989	秋の舞II ※※	松下功	第110回定期演奏会
1989	花片舞	金田潮兒	第111回定期演奏会
1990	FOREVER ELEPHANTS	阿達彰義	第112回定期演奏会
1990	風を聴く	新井英徳	第114回定期演奏会
1990	巫幻楽	西村朗	第116回定期演奏会
1991	ダブルコンチェルト	川崎絵都夫	第117回定期演奏会

※=ミュージック・フロム・ジャパンと日本音楽集団の委嘱 ※=創立25周年記念委嘱

らじがる・しりーずへズバリ発言！

木津のぶ

戦後の、まだすべてが貧しい時代に東京に住むようになって、

はじめて出会ったのが山本安英さんの「夕鶴」の舞台でした。

「こんな夢のような世界があったよ！」それは一寸説明し難い衝撃的な感動でした。これがきっかけでいろいろな劇場へ足を運ぶようになりました。

商業演劇・新劇・ミュージカルと、そこで過ごす時間は昼間の勤めの疲れも不満も消してくれる別世界でした。そんな感激を味わった時はかつて開拓地で共に汗して働き、今も頑張っている友人達にも、こんな夢の時間を贈ってあげたいと痛切に思うのでした。

その後、劇団民藝の仲間の会員になって二十余年、多くの仲間を誘い多くの舞台に接して来ました。労音にも入って音楽会にも行きましたが、邦楽とはあまり縁がなかったようです。

感動を伝えた「竹取物語」……。不可解な空席。

友達の中に箏の好きな人がいて、彼女から「今迄の邦楽と違った和楽器のオーケストラを演奏する日本音楽集団」の存在を知りましたが、直接の出会いには民藝の稲垣隆史さんが客演された竹取物語（青山タワーホール）を稲垣さんのお誘いで出掛けたのが最初でした。予想していた以上に素晴らしい舞台で、誘った友人達から、「今後音楽集団の演奏会には必ず連絡して」と頼まれる程好評でした。白根さんの箏も稲垣さんの語りも、民藝の舞台とは一味異なった感動を伝えてくれました。そして一昨年十二月津田ホールでの竹取物語の再演。此の時も稲垣さんからの御案内で、「見ないと損！本当に良い舞台なんだから！」と宣伝して三十枚の切符を斡旋し私は盲人の手引きをして張り切



って出掛けました。ところが当日ホールへ行って驚ろいたのは、当然満席で立見の人もある盛況を予想していたのに反し、そして広くもないホールに空席が目立った事です。前回にも増していい舞台で、誘った人達には大変好評で、初の盲人の方からも感謝されただけに、私には不可解な空席でした。どうしてこんな

うか？ 何故切符が売れなかったのか？ 団員の方達がノルマ制じゃないのかな？ それにしても、もっと多くの人に聞かせてあげたい、吻体ないな！と客席に坐り乍ら一人で残念がっていました。

これが講演会ならば後日記録を読めば或程度の内容は理解できるでしょうが、演劇とかコンサートのようなものは、とにかく

くその場に坐って自分で見て聞いて直接体験しないと生の感動は起り得ないと思うのです。

如何に優れた演奏でも、直接自分の心に響かなければ感動にはなり得ず、まして他人にそれを言葉だけで伝える事は不可能に近いと思うのです。

先ずお客をホールに坐らせる事から始まるのではないでしょうか？ アマチュアの発表会ならばそれも愛嬌かもしれませんが、立派にプロとして活動されている方達の演奏会なのですから、全員でその気になってホールを満席にして欲しいと思いません。

親しくしている民藝の俳優さん達は、年賀状や、旅先からの絵ハガキ、御自分の出演される芝居の切符の案内と、何彼と個人的な連絡を取る事を心掛けておられるようです。聞くところによれば、稲垣さんは常に百枚位、時には二百枚も売られるとの事です。これだけの売上げはやはり普段からの努力の結果だと思えます。兎に角ホールをお客で埋める事、それも招待客でなく、切符を売って満席にすべきたと思えます。

かつて越路吹雪のリサイタルは切符が手に入らない事で有名でした。何度か日生劇場の客になり完全にコーちゃんの虜になった経験からすれば、切符が入り手難いというのは、次の機会には何としても切符を買いたいという気持を起こさせるものです。

難解だった「巫幻楽」

昨年の116回定期演奏会にも周りの友人を誘って出掛けたのですが、初演の巫幻楽は少々難解でした。私の周囲でもそんな囁きが数多く話されていました。

聞き手の知識が低いと云われれば一言もありません。でも折角楽しく聞けた「萌春」の印象までがうすくなってしまったのは残念でした。これは音楽に限らず、新劇の芝居を見た時にも時折感ずるのですが、私達は劇場へ難解な勉強をしに行くのではなく、一刻の夢次元を味わいたくて行く時が多いのです。中には深刻に考え込むような事もあり、それはそれで結構なのですが、何を感じたらいいのか全くわからないようなものに出会うと、客席に坐る者は、演しもの

について十分な予備知識を詰めこんでこなければならぬものなかと、考え込んでしまます。まして日本人に馴染深い楽器で演奏された曲がどうしてあんなに聞き疲れのするものだったか不思議でした。

「行ってみたいな」と 思わせるポスターを。 舞台に色気を。

これは集団に対する希望ですが、宣伝方法も決して上手だとは申せません。もっと観る人に行ってみて「な」と思わせるようなポスターなど創って下さい。人目を惹く文句、そして過去に来てくれたお客を、二度、三度と足をはこぶ固定客にする努力もして欲しいものです。

立場は少し違いますが、ネムの木学園の宮城まり子さんの活躍は見習うものが多いと思えます。ネムの木の子供達の絵の展覧会にしても、コンサート、カレンダー発売なども、あの多忙なまり子さんの手書きの御案内が送られてくるのです。その人の熱意にはだされて参加するという人の輪の拡げ方は参考になると思えます。集団の当事者が

呼びかけて輪を拡げ、好意を持つているお客がいつもそれに關心を持ち続けたいものです。もう一つの不満は、演奏は素敵なのに舞台に色気がない事とか、笑顔を見せる事に照れているように感じられます。もともと楽しんで演奏して下さい。

これからの演奏会が、いつも盛況で切符も容易に買えないようなコンサートが続くよう陰ながら声援を送りつつ、失礼な暴言を謝してラブコールを終わります。

(劇団民藝仲間の会会員)

(★小見出しは編集部)

日本音楽集団の演奏会から

第16回定期演奏会

富樫 康

邦楽器集団の活力あるダイナミズム、新たに拡大される可能性を示した一夜に

日本音楽集団は、一九九〇年度モービル音楽賞を受賞し、代表者の長沢勝俊氏は紫綬褒章を受章するという目出度い出来事が二つ重なった。そういう喜びのうちの第一一六回定期演奏会である。曲目は四曲。

一曲目、三木稔作曲《前奏曲》(古代舞曲による。パラフレーズの第一曲)は、三十五年前朝日生命ホールでの初演をきいたとき、私は強いショックをうけた作品である。それ以前は多種邦楽器を使っても、これほど力強く聴衆に迫ってくるような例は無かったからである。つまり三木稔は日本楽器による管弦楽の開拓に、この作品をもって新たな第一歩を築いたのである。(田村拓男指揮、十四人編成管弦楽)。

つぎの長沢勝俊の《萌春》も秀作である。長沢は斬新さを目指してはいないが、中庸で柔和な手法の中に、人間の心の機微に触れる語りかけて融け込んでくるものをもっている。そして邦楽器の特性をよく心得て、無理のない技法で奏者、聴衆ともに納得させる力がある。《萌春》(尺八・宮田耕八朗、箏・白根きぬ子)はその好例である。

伊福部昭の《歌曲・賢多々良》は、作曲者持ち前の特徴ある語法を崩すことなく、日本音楽集団のような邦楽器群(こ

の場合雅楽器を交えた十六人編成、指揮田村拓男)を使っても、無理なくその中に個性を通用させてしまうのは驚嘆に値する。《賢多々良》は高貴な舞踊にしてみてもよいような、優雅でなやかな大宮人の芸術を彷彿させるものがある。

最後、西村朗の《巫幻楽》(委嘱初演)は、儀式が行われるような厳かな雰囲気が始まる。続く笛、箏、打楽器の房の協奏。間に入る休止部も多いので、極めて慎重な態度で演奏される。(九人の雅楽奏者を含めた二十五人編成、指揮西村朗)。これは邦楽器集団の活力あるダイナミズムと雅楽が保有する高雅な儀式性とが合体して、これまでの集団にはなかった新たな可能性が賦与され、拡大されるといふ、意義深い楽曲であり、一夜であった。

集団のメンバーも、創立当初から比べるにすっかり若返り、技術的にも向上した観がうかがえる。(90年11月6日・都市センターホール)



「巫幻楽」の初演

近年再評価著しい琵琶の特異性を現代の作曲家・奏者が拓く表現

第17回定期演奏会

富樫 康

昨年モービル音楽賞を受賞した日本音楽集団の第一一七回定期演奏会は「音が舞い音が翔ぶ琵琶楽の饗宴」との呼びこみタイトルのもとで五曲、その何れもが琵琶を必要とする楽曲を集めて催された。琵琶は日本音楽の中でも語り物の伴奏楽器であり、その点では三味線に共通しているが、三味線とは著しく異なった音色で楽器の構造も違ふし、撥がはるかに大きい。従って強奏すると打楽器的效果を生み出す特異性があり、楽曲によっては極めてドラマチックな表現をする。集団のアンサンブルの中でも独特な味わいをもつ楽器である。戦後一時衰退しかけたが近年その特異性が再評価されている。今回の五曲は古典ではなく、現存の若い作曲家或いは胡弓奏者、琵琶奏者の作曲によるものである。

順を追って述べると畦地慶司作曲、胡弓と琵琶のための《春鳳》(胡弓・畦地、琵琶・山田まゆ美)は一見平凡な曲に見えるのは、胡弓がその楽器の技巧をひけらかす意図をもっていないためで、胡弓の本来の在り方、つまり悠長で、鄙びた持ち味をそのまま生かした所にこの楽曲の特質があると思える。甲田潤作曲、尺八と琵琶のための《紫苑》は尺八(藤崎重康)より琵琶(坂田美子)の活動の方が目立つ。尺八は単純なメロディーでストリートに吹鳴し、鎮静的な方向に進み、琵琶

は丁度平家物語の劇的な弾奏(殊に後半)が印象的である。秋浜悟史作詞、田原順子作曲《焦がれの女》は道成寺伝説の清姫を物語った内容で、歌詞は最初の二行しか記されていないので、その先は不明だが、語りも弾奏(田原)も伝統的しきりに則り、モダンな手法はない。声はいかにも琵琶師らしく、美声で、琵琶も全くの玄人である。ただ語りの部分に、やや重味不足した点がある程度。それも年を重ねれば自信がもてるものと思える。山田美那子作詞、半田淳子作曲《阿国相聞歌》は有名な古典歌舞伎物語。語りも琵琶の半田淳子は、この物語に精力を集中して、一昨年はCD化したほどの熱の入れようだった。それだけに彼女の歌も琵琶も非常に高度な完成感を持ち、非の打ち所がない。特に彼女は高い音程をウラ声で歌うのであるが、その声はまた何ともいえず色艶のある美声なのである。ただこの日はやはりどういふ訳か最低弦の調絃が僅かに下がっていたが、それを除けば満点だった。川崎絵都夫作曲《ダブルコンチエルト》(委嘱初演)は、この日琵琶を四面にして合計十二人の管弦楽と稲田康の指揮で演奏した。概して長沢勝俊の作品に近似した性格の音楽といえる。曲想は嬉遊曲ふうで、気楽に楽しめるものであった。

(2月5日・パリオホール)

(音楽之友社「音楽芸術」1・4月号より転載)

第19次海外公演報告

香港アーツフェスティバルへの参加

米澤 浩

今回の参加団員は、一騎当千のつわもの揃いであることはもちろんだが、ノリの良さでも他に引けを取らないメンバーが集まった。演奏面では、松の取れない一月七日からリハーサルを開始し、十分な準備を積み二回の本番に臨んだのである。現地での受入れは大きな組織で動いているだけあって完璧で、問題もなく楽器の通関を済ませ、一路ホテルへと移動、そのホテルが国内の団員に申し訳が無い程豪華で、一気にメンバーのやる気が上昇した。(この時には、自分の現金さ加減も改めて自覚した。)打合わせの場で、ジャパンアーツのスコットさんから香港でサポートして下さるミセス・パロー・ノリコさん(香港芸術祭委員長マーティン・パロー氏夫人)を紹介して頂いたのだが、このパロー夫人には我々一同が微に入り細をうがってお世話になり、又楽しい思い出も作って頂いた。打合わせ終了後、早速パロー夫人に紹介頂いた「菜館」へと繰り出した我々は、懐れの

「北京ダック」を始め豪華中華料理に舌鼓を打ち、一時演奏の緊張から解放され英気を養った。(国内の団員に申し訳が無い。)さて翌日、朝食後リハーサルまでの時間、女性メンバーが落着かない。それもそのはず、この時期の香港は旧正月前に当り、町はバーゲンセールのワゴンがひっきり返つたような状態で、女性本来のバイタリティーを充分に發揮する条件が揃っている。私も逆らわず女房殿を送出し、散歩へと出掛けた。演奏会場へと向かうとバツタリ笛の西川と出くわした。八十四年のヨーロッパからのコンビともいえる我々、顔を見合わせて同じ事を考えていることは語らずとも察し、早速、貧乏性で同じ千支の三十男二人は会場へと急いだ。案の定、ホールのスタッフは我々を待構えていたのだ。リハーサルの一時間前になるとメンバーが続々と集合する。当然ではあるが、ソリストイックなプログラムの中の初日楽屋入り、先程までの町に居た時と顔付が違う。

気分転換の速さも演奏家には必要なものだろう。この日、琵琶のコンチェルトとも言える『香』は国内でのリハーサルをはるかに越える出来で、最後の『わ』ではメンバーそれぞれのカデンツァを他のメンバーが舞台上でニコニコしながら楽しむ演奏になり、前半の熱のこもったソロ曲とあいまって初日とは思えぬ物となった。二日目は初日の勢いもあり又、念願の「飲茶」を昼食に取ったこともあって(他の団員に本当に申し訳ない)、メンバー全員リハーサルから熱が入っていた。熱が入ったのにはもう一つ訳があった。この日の午後、リハーサル前に海から香港を観光しませんか? とパロー夫人にお誘いを戴いた。港に行くと、パロー氏所有の船が我々を待っており、それからの二時間というものは、船上の人となり香港観光クルージングを満喫(本当に他の団員の方々ごめんなさい)したのであった。そして二日目とはいえ楽屋のこの日、楽屋でしきりに現地のスタ

ッフとゴソゴソやっていると思つたら、何と笛の西川が終演後に流暢な広東語でアンコールを告げたのである。会場から万雷の拍手と笑いを取つたのは御想像の通り、一緒に舞台上に居たメンバーにまで、大受けになり、本当に和やかな雰囲気でのアンコールとなった。さて、充実したコンサートを実績として残せた事は参加団員として名誉なことでもあり、喜ばしいことである。香港で音楽集団の海外公演回数も一九九回になった。二〇〇回目はどの国、どの街だろうか?

二つの田園詩・詩曲(琵琶・笛二重奏)・座興七重・夕影の詩・秋の一日
— アンコール 江戸子守歌・八木節

《参加メンバー》

西川浩平(笛)、米澤浩(尺)、簗田司郎(三)、田原順子(琵琶)、内藤洋子(二十)、熊沢栄利子(十七)、尾崎太一(打)、蛭海涼(スタッフ)

《プログラム》

一月二十七日Aプロ
芽生え(二十絃ソロ)・詩曲(尺八ソロ)・風(十七絃ソロ)・去来(三味線ソロ)・香・わ
一月二十八日Bプロ



パロー氏の船で香港観光クルージングを楽しむメンバー

現代邦楽事情

—その9—

邦楽ジャーナル編集長

田中隆文

このシリーズタイトル「現代邦楽事情」を、私は「現代邦楽の事情」ではなく、「現代の邦楽事情」といったつもりで書いている。

何故このような前置きをしたかというところ、「現代邦楽」という言葉をこのところ、とんと目にしないし、耳にしない。ほとんど死語に近くなっているからだ。七〇年代、八〇年代にあればともてはやされた言葉である。

一つの例を出したい。
今年四月末日に、テイチクレコードから四枚組CD〈牧野由多可の音楽〉が発表される。当初、そのタイトルは〈牧野由多可現代邦楽作品集〉というものであった。それが急きよ変更された。意識的に「現代邦楽」という言葉が避けられた。

何故か。おそらく「現代邦楽」という言葉が過去をイメージさせるものになっているからだろう。また「現代邦楽」が一般に与えるイメージとして、「小難しい」というのがある。長沢・三木……といった作曲家による叙情的な曲もたくさんあるのだが、初演のみで使い捨てのようにされる音楽はそれ以上に多かったのも確かだ。以前ならそれでも文化の先端を切り開く実験的音

楽ということ、演奏者も聴衆も興味の対象となっていたのだから、ここに来てはや実験的なことがやり尽くされたのか、聴衆の反応は冷ややかに「またか」「つまらない」「もう行かない」といった感想をよく耳にする。

現代邦楽がなくなったわけではもちろんない。言葉が使われなくなったというだけで、演奏会では今も頻繁に行われている。ただし、邦楽界では過去の現代邦楽の「名作」とされるものを舞台にかけるとパターンが多い。レコード(CD)業界の動きを見ても、先の〈牧野由多可の音楽〉や、ビクターのCD〈邦楽演奏家ベストテイク〉シリーズ(現時点で六枚)、デントナーアートの二十一枚組CD〈現代箏曲CD選集〉など、現代邦楽の整理時期に来ていることがわかる。

また委嘱初演にしても、以前のようにな形で行われるのは少なくなったようだ。即ち、洋楽系作曲家の名前に全面的におんぶして、出来上がってきたものを、良かろうが悪かろうが、また演奏者が理解しているようがいまいが、とにかく発表する。発表することに意義があるという形。この反省点に立つて、演奏者は自らの要望するところを作曲

家に伝えて委嘱するということが多くなった。音楽集団の「邦楽器の祭典」シリーズや新典音楽協会の委嘱活動もその一例と考えられるだろう。

また有名作曲家に頼らず、演奏者は自らの求めるイメージを具体化してくれる作曲家を探すこともなる。そこで台頭してきたのが若手作曲家達。今引っぱりだこの新進作曲家と言えば川崎絵都夫だ。彼は反前衛を前面に打ち出している。

作曲家と共同作業で新しい曲を創作するという一つの典型的例を紹介したい。

作曲家・諸井誠は今、三橋貴風と組んで『竹籥五章』以来二十六年ぶりの尺八独奏曲を書いている。古典本曲二十六曲にちなんで三十六曲創作すると公約した。現在そのうちの三分の一が出来上がり、今年三月に飛騨古川・大阪で初演された。創作にあたっては二人だけで合宿までして曲を仕上げている。両者のおこりを捨てた姿勢と真剣勝負が人を感動させる。

先ほどの文章で、現代邦楽の今の動きを「邦楽界では」と傍点を付けたのには訳がある。邦楽界ではこのところ、やたら邦楽器が登場しているからだ。

オーケストラの定期公演、特に現代作曲家の個展では必ずといってよいほど邦楽器による作品が「現代音楽」として発表されている。中には邦楽器だけによる個展もあるくらいだ。この場合は邦楽演奏家は頼まれる立場にあるわけだ。つまり、邦楽界・洋楽界という大きな枠組で見ると、ここに来て初めてギブ・アンド・テイクが成立し始めたといえそうだ。

古典・新曲・現代邦楽——五年前なら、ほぼこの三つの言葉でだいたいの曲を括ることができたのだが、今はどこからどこまでが新曲で、何が現代邦楽なのか言い表わせなくなってきた(春の海は二十一世紀になっても新曲と呼んでいるのだろうか)。また、今はやりのバンドの音楽を聴いても洋楽・邦楽の境がわからなくなってきた。演奏会の数は格段に多くなり、その会場もホールばかりではなく、ライブハウス、お寺、屋外で行われることが多くなった。またそのレベルや質も玉石混じりで、まさに混沌としているのが、今ののだ。

〈序の曲〉(三木稔作曲)にブラボー!

カーネギーホール百周年記念コンサート

東京都交響楽団とともにカーネギーホール百周年記念コンサートに参加した集団のメンバーの活躍ぶりを伝えるニュースが届いた。バルトークやドボルザークの作品が並ぶ中で幕開きの曲として登場した三木稔の〈序の曲〉と三人の邦楽器奏者、三橋貴風(尺八)、吉村七重(二十絃箏)、田中悠美子(太鼓三味線)へのブラボーが多かったというニュースは朗報である。

ニューヨーク・ポスト
クラシック評/スーダン・エリ
オット

東京都交響楽団は金曜の夜、カーネギーホールでそのアメリカデビューを行った。(中略)

〈序の曲〉の演奏は同様に効果的でよく練られたものであったが、作品の核心への迫り方という点で、ここでは若杉と彼の能力は遥かに優れたものがあつた。尺八・箏・三味線と弦楽オーケストラのために書かれた三木の曲は、数ある伝統的なものの合成品物に比べてずっと見事な成功を見せている。オーケストラは明らかに東洋を感じさせるオーブン・インターヴァルな響きを常に維持し、三橋貴風・吉村七重・田中悠美子によって演奏さ

れた三つのソロ楽器に対して、持続するが主張しすぎない背景を形作っている。これは線的な発展よりも縦の生命力に本質的な興味を感じさせる作品である。

ニューヨーク・タイムス
ジェームス・R・オストライヒ
東京都交響楽団とその音楽監督若杉弘は金曜夜カーネギーホールでのコンサートの前半で好ましい印象を残した。彼らは日本本来の楽器——レコーダーのよ

うな尺八、チャターに似た箏、そしてリュートに近い三味線——と弦楽による、三木稔の雰囲気のある〈序の曲〉で本場を示しつつコンサートを開始した。オーケストラは気品よく抑制のきいた演奏をし、特に静謐な導入

部では不安に揺れ動く音たちでさえも卓越した抑揚を見せた。(後略)

デイリー・ニュース
金曜日のカーネギーホール、東京都交響楽団はそのニューヨーク・デビューを行った。冒頭からこのオーケストラがワールド・クラスのアンサンブルであることは明白であった。(中略)

最初の曲は日本からの珍らしい作品、三木稔の伝統楽器と弦楽のための〈序の曲〉であった。総じて魅力的な音の響き(のつながりを持ち)、この作品は、少くとも武満徹の多くの作品よりずっと興味深いということが証明された。(後略)

(訳・田中悠美子)

Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra

The Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra and its music director, Hiroshi Wakasugi, made a favorable impression in the first half of their concert on Friday evening at Carnegie Hall. Unfortunately, they did much to efface it in the second. They began close to home, with Minoru Miki's atmospheric "Jo No Kyoku," for native instruments — the recorderlike shakuhachi, the zitherlike koto and the lutelike shamisen — and strings. The orchestra played with fine restraint, especially in the hushed opening, and excellent intonation, even in the queasy bent tones. Bartok's Viola Concerto, though hardly the composer's most exotic, complemented the orchestra.

When east plays west

CLASSICAL review

By SUSAN ELLIOTT

THE Tokyo Metropolitan Symphony Orchestra made its American debut in Carnegie Hall Friday night, playing Bartok's Viola Concerto, Dvorak's Symphony No. 8 and Minoru Miki's "Jo No Kyoku," and bringing to mind some thoughts about what happens when a large body of eastern-trained musicians approaches the western European orchestral tradition. The orchestra, for all its virtuosity and sheen, failed somehow to capture the essence, the soul of the two pointedly nationalistic European works. Despite Hiroshi Wakasugi's very precise conducting, despite usually appropriate

dynamic and tempo fluctuations, the performances remained ordinary, without a discernible point of view.

In the Bartok, violist Nobuko Imai played with a great deal of competence, but little passion. A beautifully lush, warm string sound, combined with fine ensemble playing, emerged in the quiet passages of the Dvorak's tender movement, but the promise of such tasteful moments was usually dashed by the orchestra's tendency toward efficient, militaristic playing. The performance of "Jo No Kyoku" was efficient and disciplined as well, but here Wakasugi and his forces showed a far better understanding of the work's core. Scored for shakuhachi, koto, shamisen and string orchestra, Miki's piece succeeds more successfully than many in synthesizing traditions.

Usually, the orchestra maintains a decidedly Oriental interval sound and serves a sustaining, unobtrusively novel ground for the three instruments, played here by Tadahashi, Nanae Yos' Yumiko Tanaka. I proved more interesting than whose inherent intensity in its vertical life is development.

The opener was a Japanese novelty: Minoru Miki's "Jo No Kyoku" for native instruments and strings. Mainly attractive sound effects, but at least it proved more interesting than most pieces by Toru Takemitsu. Nobuko Imai was the splendid soloist in Bartok's posthumous Viola concerto — a problematic work made less so by the comprehending performance. Best of all was the brilliant, open-hearted and flawless rendition of the Dvorak Eighth Symphony that ended the program.

小さな空間 大きな出会い

工藤哲子

このページは、聴衆と演奏者がより身近な関係となるコンサートづくりを目指して行なわれている、原宿アコスタディオにおけるサロンコンサートを紹介しています。今回は加えて、昨年の第一・四回日本音楽集団定期演奏会から始めたアンケート調査について、ご報告したいと思います。

【宇宙の響き】

音楽集団と後援団体のニッポニアメイツとの共催によるサロンコンサートも四十回ほどに回を重ねてきています。昨年十一月十三日には、団員の田原順子さん(琵琶)、竹井誠さん(尺八)の助演で「尺八・添川浩史」と題した添川さんのリサイタル形式のコンサートが催されました。「詩曲」―独奏尺八のための― (長沢勝俊作曲) 板碑のうた (長沢勝俊作曲) DIALOGUE(尾崎敏之作曲) 鳩のいる風景(佐藤敏直作曲) と、いう個性豊かな曲で構成さ

れた内容深いプログラムでした。特に弦楽四重奏と尺八の為に書かれた「板碑のうた」で、弦楽四重奏に代りシンセサイザー(自動演奏)を使ったことが印象的でした。シンセサイザーと尺八の音色がうまく調和し、「宇宙」「無限」という言葉を連想させる空間が豊かに創られていました。

【集団団員への道】

平成三年三月十八日には、坂口美香(三味線)、西原祐二(笙、箏)、西原貴子(竜笛、篠笛)、外山香(箏)、白杵美智代(打楽器)の五名の研修生を中心とした若葉マークコンサートが行われました。

若葉マークコンサートは、なかなか音楽集団の定期演奏会等の舞台上で演奏する機会の少ない研修生にも演奏の場を、というこで、六年前にニッポニアメイツの方との話し合いの中から生まれました。聴衆の息づかいがきこえてくる程の距離と、調絃の際のかすかな音が明瞭に

きこえてくる音響の中で演奏することはとても緊張感を伴うものです。最近では、それに加えて、一年間の研修の成果、団員へ昇格可否をきめる資料とされる場となり、研修生にはよりプレッシャーがかかる様になってきています。

それぞれのソロ、団員の助演を得て小編成の合奏曲、そしてこのメンバーの為に創られた、「斑鳩へのみち」(長沢勝俊作曲) (二章初演)が演奏されました。びんと張りつめた緊張感の中に鋭さ、若さが感じられ、全部で九曲という編成にも熱意を感じました。

なお、研修生全員が団員となり集団の音楽づくりに参加していくことになったことを付け加えさせていただきます。

【アンケート調査開始】

定期演奏会に対しての聴衆の方々の御意見、御感想をおききして、今後の活動に反映させていきたいという思いから、第

一・四定期演奏会よりアンケートに御協力いただくようになりました。

- 演奏会を知ったきっかけ。
- 演奏会に対する感想、意見。
- 演奏以外で気付いた点。
- 邦楽器の印象期待されること。

- 邦楽器の演奏経験の有無。
- 好きな音楽、趣味。

○来場しやすい曜日、時間帯。以上項目でおききしています。

短い時間で記入していただいているにもかかわらず、御来場数のほぼ十パーセントの方が御意見を寄せてくださっています。定期会員、ニッポニアメイツとしていつも集団を聴いてくださる方からありますが、初めて音楽集団を聴かれた方、初めて生で邦楽を聴かれた方からの声の方が多数を占めています。

数回の演奏会のアンケートを続けて寄せていただけました数が多い。一回ごとの演奏会に対する御意見として受けとることはできます。しかし、傾向

の異なるプログラムで構成されている年五回の一つの演奏会の印象が音楽集団の音楽と思われるようになることが考えられます。少くとも一年通して、色々な顔の集団の音楽をきいていただいることができれば……と思います。

また、その御意見も様々で、とても紙面が足りない位ですが、今後の演奏会を行うにあたり、集団が意識しなければならぬ事も多くありました。

最後になりましたが、アンケートに御協力いただいた皆様に厚く御礼申し上げます。

邦楽 Journal Hogaku ジャーナル

尺八・箏・三味線の
月刊イベント情報誌

全国から集めたホットな
コンサート情報を中心に、
今注目の演奏家への本音の取材、
邦楽器の不思議な特性の解明、
邦楽界の諸問題等、
身近な邦楽情報を満載！
今、邦楽はおもしろい。

●バックナンバーのご案内

- 52号(91年5月)―芸能家の生活実態
- 51号(91年4月)―国の文化政策の実態
- 50号(91年3月)―見てわかる邦楽史
- 49号(91年2月)―宮下伸×相澤昭八郎
- 48号(91年1月)―三橋貴風×細野晴臣
- 47号(90年12月)―見てわかる尺八史
- 46号(90年11月)―邦楽の今と未来①
- 45号(90年10月)―宮田耕八朗
- 44号(90年9月)―見てわかる箏の歴史
- 43号(90年8月)―活躍する若人達
- 42号(90年7月)―江戸の音楽
- 41号(90年6月)―見てわかる三味線史
- 40号(90年5月)―ワールドミュージック
- 39号(90年4月)―演奏会のやり方
- 38号(90年3月)―伊藤多喜雄・国本武春
- 37号(90年2月)―邦楽CDリスト
- 36号(90年1月)―邦楽界に望むこと
- 35号(89年12月)―家元制度を考える(後)
- 34号(89年11月)―家元制度を考える
- 33号(89年10月)―邦楽の仕掛人たち
- 32号(89年9月)―どこかどう違ふ
- 31号(89年8月)―大衆と邦楽
- 30号(89年7月)―日本の音楽文化
- 29号(89年6月)―子供の音楽
- 28号(89年5月)―琵琶
- 27号(89年4月)―こんなアイデアいなか?

定価 = 450円
年間購読 = 5400円
半年購読 = 2700円
(送料サービス)
★26～16号までは定価350円

発行 / 邦楽ジャーナル

〒109 東京都新宿区高田馬場3-34-17
ベルメゾン宇野101 ☎03-3360-1329
FAX03-5389-7690

★お求めは全国の和楽器店、
または直接邦楽ジャーナルにお電話を。

田中悠美子 芸術選奨文部大臣新人賞受賞

日本音楽集団のメンバーである太棹三味線の田中悠美子(鶴澤悠美)が平成二年度の芸術選奨文部大臣新人賞を受賞した。「壹坂観音霊験記」などの三味線演奏が認められたもの。田中は後継者不足に悩む女流義太夫界の三味線方としては最年少。今後も日本音楽集団内外における彼女のユニークな活動が注目されている。



「今日の作品展'91」

日本の伝統楽器を使用した現代室内楽作品の夕べ。
日本音楽舞踊会議作曲部会主催・日本音楽集団提携
によるコンサート。

日時・10月18日(金) 7:00PM

場所・東京芸術劇場第2小ホール

千秋次郎作曲 二十絃ソロによる内なる異境へ

金藤 豊作曲 尺八と十七絃による三章

高橋雅光作曲 尺八と薩摩琵琶による孤響 他

日本音楽集団 事務局員募集

●お問い合わせ = 事務局 ☎03-3378-4741

日本音楽集団 1990年11月～1991年5月の主な活動記録

11月6日(火)	第116回定期演奏会	都市センター・ホール
11月8日(木)	新実徳英個展に出演	バルテノン多摩小ホール
11月9日(金)	清水市立師範中学校音楽鑑賞会	
11月13日(火)	No.38サロン・コンサート——尺八／添川浩史	アコスタディオ
11月16日(金)	日立女子高校音楽鑑賞会	日立市民会館
11月24日(土)	都立紅葉川高校音楽鑑賞会	江戸川総合文化会館ホール
11月28日(水)	モービル音楽賞贈呈式	如水会館
12月3日(月)～6日(木)	伊丹市学校巡回公演	
12月15日(土)	大瀧家結婚披露宴に出演	赤坂プリンスホテル
1991年		
1月27日(日)・28日(月)	第19次海外公演(香港公演)	
2月5日(火)	第117回定期演奏会	パリオホール
2月8日(金)	関市中学音楽鑑賞会	関市文化会館
2月22日(金)	栗友会PART10に出演	さゆりあん大ホール
3月1日(金)	水上ひなまつりコンサート	水上館
3月16日(土)	かつしかまちかどコンサート	水元社会教育館
3月18日(月)	No.39サロンコンサート——若葉マーク・コンサートその5	アコスタディオ
5月4日(土)	環にほん海国際芸術祭に出演	福井県敦賀市内特設会場

日本音楽集団及び団員の今後の予定

5月13日(月)	第118回定期演奏会——モービル音楽賞受賞記念演奏会	津田ホール
4月6日(土)～5月24日(金)	市川猿之助スーパー歌舞伎「オグリ——小栗判官」の音楽を長沢勝俊が担当	
5月8日(水)～22日(水)	新橋演舞場(6月公演は名古屋・中日劇場)	
5月8日(水)～30日(木)	山彦物語(邦楽器のみの伴奏によるミュージカル)に竹井誠・工藤哲子が出演	北海道各地
5月16日(木)～18日(土)	水川寿也・ロン・ハドレー・アンサンブル・コンサート	
5月18日(土)	横濱ジャズメンクラブ/京都・大谷大学講堂	
5月18日(土)	富山・福野文化創造センター円形劇場ヘリオス	
5月27日(月)～30日(木)	義太夫三味線の一日体験教室(田中悠美子が講師)	
5月27日(月)～31日(金)	新橋演舞場別館スペース・アルファ	
5月27日(月)～31日(金)	長野県上水内地区学校公演	
5月28日(火)	佐賀県中学芸術劇場(A)	
5月31日(金)	駅コン・NEXT WEEK(坂田誠山・米澤浩とフュージョン・バンド)	東京駅
6月3日(月)～7日(金)	No.40サロン・コンサート——ラニー・如月・セルティン尺八の展開	アコスタディオ
6月15日(土)	松本市学校公演	松本市音楽文化ホール
6月17日(月)	福島市おかせさん合唱団コンサートで共演	福島市音楽堂
6月21日(金)	尺八と二十絃琴による「KAZE'91」に吉村七重が出演	パリオホール
6月21日(金)	日本音楽集団特別コンサート(主催＝連合通信社)	セシオン杉並
6月23日(日)	鳥山子供劇場「薩摩琵琶を楽しむ会」に坂田美子出演	鳥山区民センター
6月24日(月)	三橋貴風BAMBOONALライブ	スタジオ錦糸町
6月26日(水)	日本の音とんだ・出逢いー琵琶とサズとうたとー坂田美子が出演	スタジオアムス三軒茶屋
7月2日(火)	米澤浩・熊沢栄利子ジョイント・リサイタル'91	津田ホール
7月4日(水)	日本の音とんだー太神三味線の巻に田中が出演	スタジオアムス三軒茶屋
7月11日(木)	第119回定期演奏会——海外からの作品特集・そのIII	パリオホール
7月11日(木)	第七回東京の夏音楽祭'91「楽器の姿・音の姿」箏と琵琶の同属楽器レクチャーコンサートに半田淳子出演	草月ホール
7月11日(木)	第7回東京の夏音楽祭'91「楽器の姿・音の姿」箏と琵琶の同属楽器レクチャーコンサートに半田淳子出演	草月ホール
8月4日(日)	川口・エジンバラ国際交流フェスティバル第四夜「スコテイツシユエラブと琵琶の世界」に半田が出演	
8月4日(日)～22日(水)	川口総合文化センター・リリア音楽ホール	
8月23日(金)～25日(日)／30日(金)～9月1日(日)	宮田耕八朗尺八合奏研究会	
9月7日(土)	サロンコンサート・イン・マイ・ライフに米澤・熊沢・太田幸子が出演	二俣川サンハート
9月9日(月)～13日(金)／26日(木)～28日(土)／	山形市中学校音楽鑑賞会	山形市市民会館
9月14日(月)～18日(金)	英国ジャパンフェスティバル三橋・吉村ジョイント・リサイタル・ツアー	ロンドンBBCホール他
9月18日(水)～21日(土)	山形市中学校音楽鑑賞会	山形市市民会館
9月19日(木)～25日(火)	第120回定期演奏会——うたと邦楽器しりぞ	津田ホール
9月24日(火)	琵琶「半田淳子の世界」	武蔵野芸術劇場
9月30日(月)～10月4日(金)	第121回定期演奏会	津田ホール
10月14日(月)	頌栄女子学院パーティに出演	新高輪プリンスホテル
10月17日(木)	日本音楽舞踊会議作品発表会	東京芸術劇場
10月18日(金)	豊川市公演(主催＝豊川市ライオンズクラブ)	
10月19日(土)	熊本・箏曲の祭典で、宮田の易しい合奏曲作品を発表	
10月20日(日)	11月21日(月)～25日(金) 佐賀県中学校芸術劇場(B)	
11月7日(木)	第121回定期演奏会——秋の総合定期	津田ホール

南北朝鮮の音楽団「アリラン」を熱唱

「環にほん海国際芸術祭」に韓国、北朝鮮、ソ連、中国、日本の五カ国が参加

日本音楽集団は五月三日から五日まで福井県敦賀市で開催された「環にほん海(東海)国際芸術祭」(福井県など主催)の二日目「伝統芸術の祭典」に出演しました。

ウラル・コサック民族アンサンブル(ソ連)、韓国中央國楽管絃楽団とサムルノリ(韓国)、上海京劇院(中国)、朝鮮民主主義人民共和国平壤音楽舞踊団(北朝鮮)、日本音楽集団(日本)の「東海」を共有する五カ国からの

参加で有意義な文化交流を行ってきました。オープニングは日本音楽集団の演奏する「トロイカ」に各国が順に加って盛上がつて行くという感動的な交流から始まりました。卓球では朝鮮

統一チームが結成され、世界チャンピオンになり話題を呼びましたが、福井では統一への思いを込めた韓国と朝鮮民主主義人民共和国(北朝鮮)の芸術団が手を取合って「アリラン」を熱唱し、客席の在日韓国・朝鮮人



フィナーレは南北朝鮮の「アリラン」の熱唱



オープニングは「トロイカ」を演奏しながら各国が登場

の観客らも一緒になって歌うという感激的な場となりました。この模様は六月一日と八日の両日、いずれも朝八時三十分

一九九一年度日本音楽集団研修生紹介

石田忠史(28) 尺八

東京電機大学工学部中退、都山

流准師範、(師)坂田誠山、星組

合奏団団友

原田富士江(24) 三味線

東京芸術大学大学院卒、(師)菊

岡裕晃、田島佳子、味見亨

丹野さえ(24) 琵琶

NHK邦楽技能者育成会第32期

卒、(師)半田淳子、星組合奏団

団員

十時の時間にNHK衛星第二TVで報送されることになっています。

大泉一美(29) 箏

洗足学園短大卒、NHK邦楽技

能者育成会第34期卒、宮城会教

師、(師)川上弓子

城ヶ崎美保(23) 箏

東京芸術大学別科卒、宮城会教

師、(師)池上実

河原抄子(19) 箏

筑紫女学園卒、宮城社助教、

(師)菊地悌子



INTERNATIONAL MUSIC SERVICE
アイ・エム・エス

●楽器リース●保管●移動●ステージ・スタッフ派遣

〒167 東京都杉並区上荻 2-21-25
オリオンシャット1F
PHONE. 03-3397-2292



日本の響
真山銘尺八

〒561 豊中市服部本町5丁目5-6 TEL(06)863-0564

デザイン
水谷繁山

琴・三絃

一 藤

貸箏多数あります。

[八千代店] 〒276 千葉県八千代市
八千代台東1-29-12
プレステージ90-102号
☎0474-84-8859

[高円寺店] ☎03-3312-6392

尺八

露秋

西田露秋

〒794 今治市新谷甲798-1
電話 (0898)48-1097・1257

信 頼 の 品 質

箏 三 味 線

◆ 田波楽器株式会社

〒537 大阪市東成区
東今里二丁目4-6
TEL 06(976)1885
FAX 06(974)9632

邦楽器全般

わらびみや 楽器店

〒598 泉佐野市栄町6-11
TEL 0724(63)1246

創業・昭和8年

お琴・三味線の琴栄

● 東海一の実績を誇る店



御琴・三味線専門
琴栄楽器店

代表・増田康壽
〒500 岐阜市司町九(大学病院前)
TEL 0582 1826代



(有)誠和音芸

事務所が移転致しました。

【新事務所】

〒156 世田谷区桜丘5-51-7

パラスト 千歳船橋

☎03(5490)0448

この一瞬にこの雄大を!

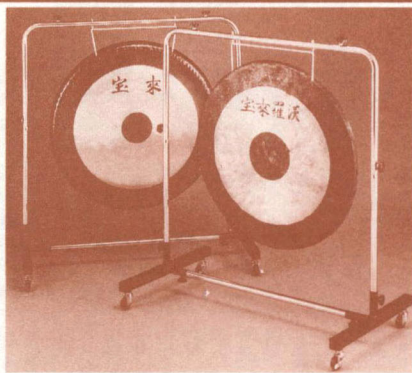
宝来・宝来羅漢

サイズ	宝 来		宝来羅漢(中国武漢製)	
	品番	価格	品番	価格
32" (81cm)	G-32	¥118,000	GR-32	¥144,000
36" (91cm)	G-36	¥168,000	GR-36	¥217,000
40" (101cm)	G-40	¥220,000	GR-40	¥325,000

*宝来ゴングは、22" (56cm)より製造しています。別途カタログをご参考下さい。

中国長年の歴史から生まれたゴングの一品品……宝来羅漢。
20年の技術の結集とクラフトマンシップから生まれた国産唯一のゴング……宝来。
ここに品質、デザインも変わり新たに登場。
どちらも、その音色は重厚でクリエイティブな響きをもち、クラシック・ロックなど幅広いサウンドにマッチします。

30"以上のゴングは、従来の価格でスタンド・マレット付になります。



株式会社 **アイダ楽器**

〒131 東京都墨田区押上2-42-1
☎03-3614-4115

●カタログ希望の方は200円切手を同封して住所、氏名、年齢、電話番号を明記の上、お願いします。

笥山銘尺八

琴古、都山各寸美麗仕上
特製品煤竹も各寸揃います。

木村 笥山

〒379-16 群馬県利根郡水上町谷川437

TEL.0278-72-4108

尺八の店

都山流 尺八
琴古流 尺八
及楽譜販売

銘木常盤尺八発売元

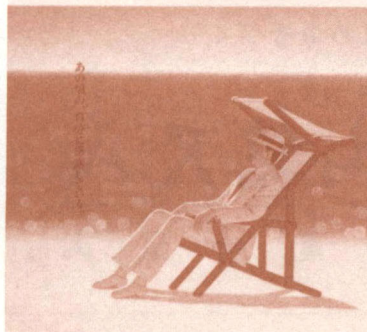
樹脂製 1尺8寸 13,000円
木製 1尺3寸より2尺3寸 14,000円~29,000円
品物の輸送もお受けしております。御連絡下さい。

竹管高級品在庫豊富(株)トキワ楽器

本 社 〒110 東京都台東区東上野3-6-2 電話(3832)7555・5560
連絡所 〒336 浦和市常盤6-12-15 電話0488(32)1444

積立介護費用保険

新発売



健康はご家族の大きな財産。
だから備えが必要ですよ。

※ 損害保険の安田火災はあなたの暮らしをワイドに補償致します。

※ あなたの保険設計は明和損害保険企画におまかせ下さい。

日本音楽集団指定損害保険代理店
明和損害保険企画

RM 小笠原 明男 オフィス☎3937-0547
安田火災海上保険㈱城北支社☎3962-7311

舞鶴

Maizuru

邦楽商品券 舞鶴

日頃、邦楽ご愛好の皆様方のご要望にお応えし、
日本の音と心をつなぐ邦楽器店独自の商品券が登場いたしました。
邦楽に携わるお祝いや、
感謝のご贈答など、幅広くご利用ください。

東京都(区)	
杉並区	琴三越店 河合
杉並区	須田邦楽器店
杉並区	木福
台東区	菊園
台東区	菊園三越店
台東区	ばら一楽器店
中央区	(有)三雅
中央区	朝日家
中央区	(有)鶴川楽器本店
世田谷区	竜屋
世田谷区	(有)大津琴三越
大田区	亀屋楽器店
大田区	石村屋
大田区	菊屋
江戸川区	向山楽器店
中野区	きと岡
品川区	竜屋三越店
品川区	菊屋
墨田区	山形屋
北区	登喜和屋
豊島区	登喜和楽
豊島区	菊初三越店

目黒区	(有)琴光堂和楽器店
渋谷区	菊屋楽器店(円山町)
渋谷区	菊屋(広尾)
渋谷区	菊屋(恵比寿)
文京区	博信堂
文京区	音音楽器店
文京区	東京邦楽器
新宿区	空屋一太
新宿区	菊園楽器店
練馬区	おここの店 矢野
練馬区	(株)社社屋
練馬区	小沢三越店
練馬区	梅屋楽器店
練馬区	大田楽器店
練馬区	千鳥邦楽器
港区	石村屋

昭島市	〇〇〇(3792)1841
昭島市	〇〇〇(3461)19264
町田市	〇〇〇(3473)1933
立川市	〇〇〇(3715)4543
立川市	〇〇〇(3821)7404
立川市	〇〇〇(3821)2806
八王子市	〇〇〇(3811)9665
八王子市	〇〇〇(3203)4740
千代田区	〇〇〇(3260)2027
千代田区	〇〇〇(3935)5852
千代田区	〇〇〇(3922)7506
千代田区	〇〇〇(3995)7512
千代田区	〇〇〇(3924)8079
千代田区	〇〇〇(3577)2626
千代田区	〇〇〇(3964)5531
千代田区	〇〇〇(3431)5640

片切琴三味線店	〇〇425(41)0807
(株)邦月	〇〇425(52)1419
龍琴三越店	〇〇427(96)3541
新華堂	〇〇425(31)1919
菊園楽器店	〇〇425(22)0247
邦月	〇〇426(25)2264
同華楽器店	〇〇426(24)7411
東	
邦楽器商一徳	〇〇474(84)8859
十才夕邦楽器	〇〇474(67)5767
菊音	〇〇471(63)3370
関口琴三味線店	〇〇479(24)1391
和楽器 橋屋	〇〇473(65)5767
(株)サト夕楽器	〇〇487(54)6897
新柏屋楽器店	〇〇485(21)3085
池田邦楽器	〇〇487(74)9115
金子三味線店	〇〇484(41)3323
初屋琴三味線店	〇〇485(41)3236
菊芳琴三味線店	〇〇486(41)2410
落合邦楽器	〇〇492(66)4348
菊園楽器店	〇〇492(22)5686
伊藤楽器店	〇〇493(22)4388

250店舗で

●日本全国でご利用いただける邦楽商品券●

「邦楽商品券舞鶴」は、北海道から九州まで全国に網羅されている約250店の取扱い店をご利用できます。
お引き換え期限もなく、取扱い店の商品、技術料、サービス料などとしても便利なお引き換えができます。
※お求めは、各取扱い店でどうぞ。

— お求めの音づくり —

タクザン
澤山 銘尺八

尾崎 沢山

〒169 新宿区大久保2-20-3
西大久保コーポ202

〒005 札幌市南区澄川4条9丁目4-10
☎011-582-8119

永い伝統と経験から創り出される
豊富な「止水の和楽器」



— 新発売 —
明鏡笛(しの笛)
(正律管)
ベース三味線

止水の和楽器 発売元

明鏡楽器

〒130 東京都墨田区横川4-1-2 ☎(03)3623-6349(代表)

代表 長沢 勝俊
副代表 田村 拓男
運営委員長 尾崎 太一
事務局 霜島 素子
監事 奈良 義久
 芥沢 英雄 (参与)

名譽団員 山田美喜子

団員連名

望月 太八 (笛)
西川 浩平 (笛)
宮田耕八朗 (尺八)
坂田 誠山 (尺八)
三橋 貴風 (尺八)
藤崎 重康 (尺八・笛)

賛助会員
(株)みやこ編物

滝沢 修 霜島 邦子 増田 啓子
野坂 操寿 古川羽衣山
鶴田 錦史 丹野井成寿

〈団友〉

青木 誠 芹沢 英雄 増田 睦美
秋浜 悟史 高野 直子 三木 稔
荒谷 俊治 田嶋 文士 宮本 幸子
稲垣 隆史 田中 利光 元橋 康男
小田切清光 鶴野 和子 矢崎 明子
川崎 祥悦 戸井 昌造 柳家小三治
菊地 悌子 藤倉 呂悦 横山 勝也
楠 知子 藤倉 呂船
鞍掛 昭二 仲俣申喜男
鯉沼 昭二 中村 八大
佐藤 敏直 野口 鎮
芝 祐靖 広瀬 量平
清水 義矩 福田 輝久 王 燕樵
杉浦 弘和 嵐山 晴由 張 晚輝
砂崎 知子 星 旭

竹井 誠 (尺八・笛)
米澤 浩 (尺八)
水川 寿也 (尺八) 運
水谷 雅康 (尺八)
畦地 慶司 (胡弓・作曲)
野口美恵子 (三味線)
太田 幸子 (三味線) 運
笹田 司郎 (三味線) 運
田中悠美子 (三味線)
工藤 哲子 (三味線)
半田 淳子 (琵琶) 運
田原 順子 (琵琶)
坂田 美子 (琵琶)
坂井 敏子 (三味線・胡弓)
白根さゆり (箏)
吉村 七重 (箏)
花房はるえ (箏・三味線)
宮越 圭子 (箏)

木村 玲子 (箏)
内藤 洋子 (箏)
熊沢栄利子 (箏)
大品栄穂子 (箏)
佐藤由香里 (箏)
島崎 春美 (箏)
久東 寿子 (箏)
桜井 智永 (箏)
山田 明美 (箏)
尾崎 太一 (打楽器) 運
西川 啓光 (打楽器) 運
高橋 明昇 (打楽器) 運
黒坂 昇 (打楽器)
細谷 一郎 (打楽器)
前田 文男 (打楽器)
田村 拓男 (指揮・打楽器) 運
稲田 康 (指揮)
長沢 勝俊 (作曲)

秋岸 寛久 (作曲)
中島 隆 (楽器係)
石田 忠史 (尺八)
原田富士江 (三味線)
丹野 さえ (琵琶)
大泉 一美 (箏)
城ヶ崎美保 (箏)
河原 抄子 (箏)
協力団員 伊藤 惣一
地方在住団員 田嶋恵美子
一九九一年四月一日現在

〔本年度委員〕
運印 運営委員

〈日本音楽協会支部〉

関西支部 田嶋直士
水戸支部 齊藤幸山
長野支部 佐藤幸山
山梨支部 郷見
長崎支部 牧山雅楽部
熊本支部 古川羽衣山
秋田支部 野口裕子
TEL TEL TEL TEL TEL TEL

邦楽の会つばら事務局

●本誌第26号の広告掲載者御芳名

アイ・エム・エス/柳アイダ楽器/一勝/いづみや
楽器店/大瀬邦楽器/尾崎沢山/柳家庭音楽会出
版部/木村葉山/等光堂和楽器店/琴栄楽器店/
御誠和音堂/田波楽器株式会社/柳トキワ楽器/
水廣真山/西田露秋/邦楽ジャーナル/明鏡楽器
/明和損害保険企画/柳ワタ楽器(アイウエオ順)

編集後記

★特集・座談会「日本音楽集団の委嘱・創作活動」をまとめるには大変時間がかかってしまいました。問題は多岐にわたる、出席者の発言は切捨てたものが多く、限られたスペースにまとめるには編集者の大いに悩むところでした。写真も手廻りで始まりましたがうまく行かず、撮り直すこと二度三度、ついに工藤氏の顔写真はうつろな眼のまま発進せざるを得なくなったことを申し訳なく思います。★「日本音楽集団及び団員の今後の予定」は年々見える傾向にあり、この分だと次回には二ページ近くを確保しなければならぬかも知れませんね。団員個々人の旺盛なバイタリテイ★と売れっこぶりを多としましょう。

★今回の編集委員
田村拓男、米澤浩、工藤哲子、久東寿子、添川浩史、花房はるえ、藤崎重康、内藤洋子、長沢勝俊、野口美恵子、霜島素子

邦楽現代 Pro Musica Nipponia 第26号

定価 二〇〇円
一九九一年五月十三日発行
発行所 日本音楽集団

東京都渋谷区笹塚3-17-1 滝沢ビル302
〒151 電話 〇三三三三七八・四七四一
発行責任者 田村拓男
印刷所 光藍社

●待望の長沢作品を縦譜化 長沢勝俊作品集

No.1 飛騨によせる三つのバラード	800円	No.11 箏協奏曲	700円	〔尺八譜〕 飛騨によせる三つのバラード 400円 まゆだまのうた 300円 秋によせる三つの幻想曲 400円 六連星 300円 二つの田園詩 300円 樹冠 300円 萌春 400円 四つの小品 400円
No.2 まゆだまのうた	400円	No.12 雪三態	800円	
No.3 合奏曲 六段	600円	No.13 北国雪賦	900円	
No.4 春三題	600円	No.14 樹冠	700円	
No.5 秋によせる三つの幻想曲	600円	No.15 萌春	500円	
No.6 箏のしらべ	500円	No.16 合奏曲みだれ	700円	
No.7 合奏曲 千鳥	500円	No.17 合奏曲八千代獅子	600円	
No.8 六連星	400円	No.18 箏四重奏曲	700円	
No.9 箏三重奏曲	600円	No.19 四つの小品	700円	
No.10 二つの田園詩	500円			

(有) 家庭音楽会出版部

〒810 福岡市中央区峰国2-15-20
☎(092)741-2458 振替口座福岡8-5500

箏

二十絃箏

箏を受するすべての人の繊細な感情を忠実に音に表現するために、楽器の本質を追求した箏

日本音楽集団推薦

琴光堂和楽器店

東京都目黒区碑文谷2-19-15 TEL(3792)8481 FAX(3792)8437

日本の音、
その磨きぬかれたひびき



尺八

蛸蝶
コチョウ



株ワダ楽器

〒939-18
富山県東砺波郡城端町信末451
TEL (0763)62-2348(代)
FAX (0763)62-3878

◆蛸蝶尺八、総合カタログ等ご希望の方はご一報ください。